身舎外周柱列の解釈と上部構造

箱崎和久（奈良文化財研究所）

Ⅰ　はじめに

発掘調査で検出される、いわゆる四面廂建物には、柱穴もしっかりとして柱筋もそろい、その名称にふさわしいものと、柱穴に大小があり、また身舎と廂の柱筋がそろわない、などによって四面廂建物と認定してよいか頭を悩ます遺構も少なくない。このような遺構の解釈を試みる場合に、その根拠としたいものが現存建築だろう。そこで、ここでは、現存する古代建築における身舎の外周にめぐる柱列、これには後述するような、廂や裳階（もこし）、縁などがあるが、身舎柱と廂柱、裳階柱、縁の柱（縁束（えんづか）と呼ぶ）などの柱筋や太さ、長さといった関係に着目して、これを整理しておきたい。

そのために、まず四面廂と解釈できる発掘遺構の平面類型について先行研究をレビューするかたちでまとめておく。つぎに、これらの遺構は掘立柱建物である場合が多いが、掘立柱建物の上部構造を考える上での前提条件、すなわち柱穴の大きさや深さなどから、上部構造をどのように考えるべきか、現状でどのような根拠をもとに上部構造を考えるのか、またそれにもとづいた発掘調査時の注意点について述べる。その上で、現存する古代建築にみえる身舎柱と外周柱について分析する。

ところで、現存建築は礎石建物であるから、これらの成果が掘立柱建物に適用できるかどうかを検証しなければならない。しかし古代の現存する伝統的建造物に掘立柱による建物は存在しないため、正倉院文書にみえる藤原豊成板殿、すなわち奈良時代の貴族住宅における建築部材の寸法を、現存する古代建築からの分析成果と照らし合わせてみたい。以上から、四面廂建物の建築的意義についてまとめる。

このような視点で現存建築を分析した先行研究で、まとまったものは管見の限りないようだ。伝統的建造物の修理工事で、旧状に復元する場合など、類例調査として現存建築に関する事例収集をおこない、修理工事報告書に掲載しているものはある。ただし、これは一部の上部構造や意匠的な細部などが中心であり、柱そのものとその並びという視点は、ほぼあきらかであり、とくに研究対象にならなかったと考えられる。このような分析が必要となる場面は、やはり発掘遺構から上部構造を考察する場合だろう。しかしながら、こういった分析は、後述するような前提条件にもとづいて、半ば常識的におこなわれてきたと思われる。本稿はそれらを検証することにもつながるであろう。

なお、**表1**に掲げた現存建築の部材寸法などは、修理工事報告書や、建築史の基礎資料として集成されている図面類などから採取したものである。そのため引用した寸法が後世の補修などによって取り替えられた部材のもので、当初材でない可能性もある。ただし、部分的な取り替えであれば、他の部材との関係などから、当初材と同じ大きさとしなければ納まらなくなるので、基本的には当初材の大きさを保持すると解釈して差し支えない部分も多いだろう。建物の規模や構造などの変化をともなう大規模修理ではその限りではないが、その場合は建物の変遷としてあきらかとなっている場合が多いため、記述の中で述べていくこととしたい。

そのなかで、もっとも問題が大きいのは縁束である。縁束は地面に接しているからだけでなく、建物のなかで風雨があたりやすい部位であり、屋根まわりの部材と同様に傷みやすく、後世の修理で取り替えられることも多い。また、建物本体の構造には直接関係しないため、全体を取り替えてしまえば、当初の形式を残さずに改変させることも可能であり、現状をただちに当初まで遡らせることはできない。ただし、当初の規模や形態がわかるものも多くないので、ひとまず現状で比較してゆくこととしたい。

冒頭で、“いわゆる四面廂建物”と述べ、また表題では、“身舎外周柱”としたが、建築的に四面廂建物と呼べば、身舎の四面に廂をめぐらせ、ここに一体の屋根をかけた建物と考えるのが一般的である。つまり、ここには身舎外周柱が縁束や裳階の柱といった解釈をさしはさむ余地はおそらくほとんどない。しかしながら、本稿の議論は、発掘調査で検出される、いわゆる四面廂建物の平面形式、すなわち身舎の四周に柱穴がめぐる平面をもつ建物遺構の身舎外周柱が、廂なのか、縁なのか、裳階なのか、という点が重要なのであるから、これを四面廂建物と呼ぶのははばかられる。“いわゆる”を付した理由はそのためで、考古学的には、四面廂建物と呼ばれている遺構も、建築的には四面廂建物と呼ぶことができないこともあるだろう。以下では、この混乱を避けるために、“いわゆる四面廂建物”、つまり、身舎の四周に柱穴をもつ発掘遺構を、「 」つきで、「四面廂建物」や「四面廂」と表記し、建築的解釈にもとづく場合は「 」のない、四面廂建物と表記することとする。またこれにともなって、「四面廂建物」の外周柱を指す場合は「廂」や「孫廂」などと表記する。したがって、「廂」が縁束である場合も、本稿の表記ではありえることになる。外周柱あるいは身舎外周柱と呼ぶ場合は、とくに考古学的あるいは建築的の区別なく、文字どおり、身舎外周の柱全般を指すこととしたい。なお、「廂」や廂に対する用語である“身舎”には混乱が生じないと考えられるので、煩雑を避けるため、「 」は付さない。

Ⅱ 「四面廂」平面の類型と構造

「四面廂」の平面類型 「四面廂建物」の平面には、大きく２つの類型があることはすでに各書で指摘されている（たとえば文献11）。すなわち、身舎の四周を１間幅で「廂」がめぐる類型と、身舎に対応する四面にのみ「廂」を設けるため、「廂」柱による建物平面が隅欠きになる場合である（図1）。一般的なのは前者であろうから、今回の分析対象は前者を中心におこなうこととする。

「四面廂」平面の身舎柱と「廂」柱の関係では、柱筋が揃うか否か、また身舎柱と「廂」柱の規模といった視点による分類がある（文献11）。まず、柱筋の関係では、「廂」柱が、①身舎柱とそろう、②身舎柱間中央に位置、③柱筋と柱間中央の両方に位置、④不規則、の４つの分類がなされている。

つづいて柱穴規模の視点からは、身舎柱と「廂」柱の柱穴が、Ⅰ：同規模、Ⅱ：身舎柱が若干大きい、Ⅲ：身舎柱が格段に大きい、といった３つの分類がある。以上の分類を勘案すると、「四面廂」の平面には、①Ⅰ：「廂」の柱筋が身舎とそろい、「廂」柱が身舎柱

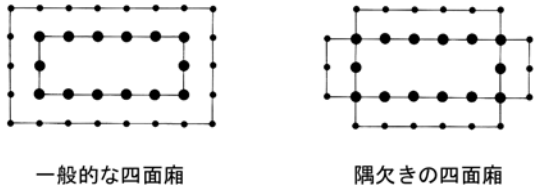

図１　四面廂の２類型

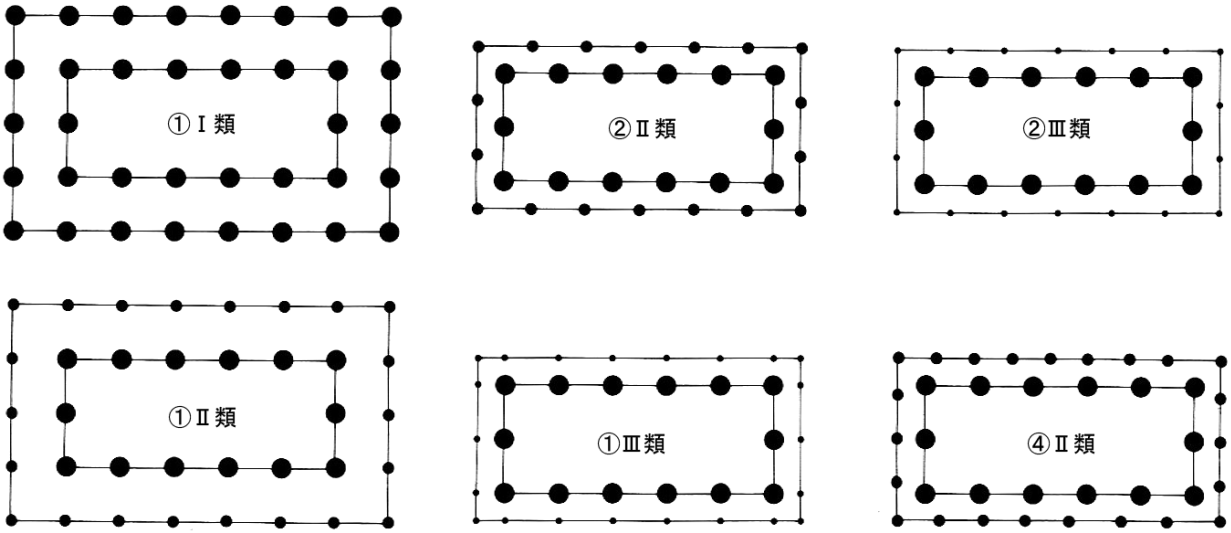

図２　四面廂建物の類型